

植木等じゃないけれど「遺憾に存じます」

林田裕章

バイロンハイネの熱なきも
石を抱きて野にうたふ
芭蕉のさびをよろこばず

作詞与謝野鉄幹、作曲者不詳の「人を恋ふる歌」に、こんな一節がある。何よりも志を大事にしなければならなかった明治の男の、若い述懐か。

改めて思う。このころの日本人は偉かったと。よく勉強していたと。無論、学問の出来る階層は極端に限られていて、日本人の平均が「芭蕉のさび」をわきまえていたはずはないが、大正が終わって間もなく生まれた私の父は、貧農の四男だったにもかかわらず、若いころから短歌に親しんだ。物心さえつかない私が初めて「人を恋ふる歌」を聴いたのは、いささかの酒に酔った父の声だったと記憶している。

俺は芭蕉のさびをわきまえているだろうか。石を抱いて野をいきつ、そこに自分の命と不可分の、まことの詩を見い出すことが出来るだろうか。否。

戦後の高度成長時代の申し子のような世代で、当たり前のように豊かになる生活を歎び、当たり前のように大学に行かせてもらった。野垂れ死にを覚悟して不朽の詩をつくった芭蕉の心は、はるか天上にあり、若くして芭蕉のさびを理解していた鉄幹の心は、はるか雲の上にあって、とても私の手の届くところではない。

芭蕉は50年生きて死んだ。鉄幹は62年だ。比較するのも恐れ多いが、私は今年63。実に慄然とする。誠に遺憾に存じます。